

トーマス・マンとヘルマン・ヘッセの
ゆかりの地を訪ねて III

田 中 博

はしがきにかえて

ニューシャテル近傍マリーン，1946年11月19日

トーマス・マン兄。

ご祝詞とストックホルムをついに決心せしめたご功績とに対して衷心からのお礼を申し上げます。……私の友人たち，なかでも妻が本当に子供のように喜んで，シャンパンを抜いて祝ってくれました。…私はあなたの手を握ります。そして私があなたとかつてミュンヘンで知りあった日を——フィッシャー家の人たちの住んでいたホテルで，1904年のことでしたか—思うのです。お手もとに私の論文を集めた小冊子とどくことを望んでいます。これらの論文は，十分に害のないものです。しかし少なくとも立場と志操とはいつも変わっていません。

あなたとご家族とに心からのご挨拶を申し上げ，ご多幸を祈ります。

H・ヘッセ (1)

トーマス・マンとヘルマン・ヘッセが最初に出会ったのは，1904年ということが，ヘッセ自身の手で書かれているのが，これでわかるが，1904年のいつかは明確でない。私の4度目の訪独に当たる1983年の夏の，シュトットガルト郊外，マールバッハにあるシラー記念館見学の際に，買入れた，“Hermann Hesse——1877・1977 Stationen seines Lebens, des Werkes und seiner Wirkung”のS. 165 の次の記述によってその日付が明らかとなった。

Samuel Fischer stellte seinen jungen Autor Hermann Hesse zwischen dem 3. und 5. April 1904 in München seinen bereits erfolgreichen Autor Thomas Mann vor. (2)

ミュンヘンでの出会いについて，ヘルマン・ヘッセの手紙がもう一通ある。

1950年6月

七十五回の誕生日にトーマス・マンに宛てて

トーマス・マン兄。

あなたの知己を得てからも随分の時が経ちましたね。あれはミュンヘンのあるホテルでのことでした。二人とも私たちの出版社であるS・フィッシャーに招待されていたのでしたね。あなた

の方からは最初の短篇幾つかと『ブッデンブローク家の人びと』とが、私の方からは『ペーター・カーメンツィント』が出されていたのでした。二人ともまだ独身で、どちらも将来を期待されていましたが、ほかには別にもちろんそう似てはいませんでしたね。それは服装や履物でもうすぐ分ったことです。この最初の出合いのとき、なによりも私はあなたに、もしかしてあなたはアッシー公爵夫人の三つの小説の作者と親戚ではいらっしゃるかどうかとお尋ねしたのですが、この出合いは、同僚としての友情の始まりというより、むしろ偶然とまったく文学的な好奇心とのしるしのもとにありました。…… (3)

トーマス・マンは1875年6月6日、北ドイツ、リューベック市に生まれる。ヘルマン・ヘッセは南ドイツ、ヴェルテムベルク州カルプに1877年7月2日に生まれた。ヘッセの方が二才若い。上記のヘッセの書いた手紙にある、始めて出合った時期の作品について確認すると、マンは、フィッシャー出版社から最初の長編小説『ブッデンブローク家の人々——ある家族の没落』が1901年8月中旬に出版されて、一人前の芸術家として名をなした。1903年には短編小説集『トリスタン』（この中に有名な『トーニオ・クレーガー』が収められている。）が出版されていた。一方のヘッセは *Zwischen September und November 1903 brachte die Neue Rundschau* *〈einen gekürzten Vorabdruck des Romans〉* *Camenzind* *〈〉*. Am 15. 2. 1904 erschien das Buch vermutlich in einer Auflage von 3000 Exemplaren. (4)

S・Fischer社の*Neue Rundschau*〈誌に見本として、1903年9月～11月にかけて掲載された。Peter Camenzindが1904年2月15日おそらく初版3000冊で出版され、たちまち版を重ねる好評を博し、無名のヘルマン・ヘッセを一躍有名にしたのである。S.Fischerが、ヘッセをミュンヘンで、トーマス・マンに引き合せたのが、1904年の4月3日～5日であったと記録があるのをみれば、トーマス・マンの側に余りその出合いについて記述が残っていないのは、まだ十分、ヘッセの名が知られるには時間的に短かすぎる時であったのかもしれない。ただ、明らかに言えることは、ヘルマン・ヘッセの側には、その出合いがかなり明確に記憶に残っているということである。

2) バーゼル

バーゼルについて、ヘルマン・ヘッセ自身が1937年7月4日付の*〈National-Zeitung Basel〉*新聞の記事で、次のように表現している。

Basel war für mich jetzt vor allem die Stadt Nietzsches, Jakob Burckhards und Böcklins. (5)

バーゼルは私にとって特にニーチェ、ヤコブ・ブルックハルト、ベックリンの街であった。

彼が、チュービンゲンのヘッケンハウアー書店を辞めて、バーゼル市のライヒ書店*〈Die Reichisch Buch handlung〉*に移って来たのは、1899年の秋であった。

Ich hatte keinen anderen Wunsch, als wieder nach Basel zu kommen; es schien dort etwas

auf mich zu warten, und ich gab mir alle Mühe, als junger Buchhandlungsgehilfe eine Stelle in Basel zu finden. Es gelang, und in Herbst 1899 kam ich wieder in Basel an, mit Nietzsches Werken (soweit sie damals erschienen waren) und mit Böcklins gerahmter Toteninsel in der Kiste, die meine Besitztümer enthielt. Ich war kein Kind mehr und glaubte mit dem Basel der Kindheit und dem Missionshaus und seiner Atomsphäre nichts mehr zu tun zu haben ; ich hatte schon ein kleines Heft Gedichte veröffentlicht, hatte Schopenhauer gelesen und war für Nietzsche begeistert. Basel war für mich jetzt vor allem die Stadt Nietzsches, Jacob Burckhards und Böcklins. (6)

「私はもう一度バーゼルに行きたい、という願いのほかは何も望まなかった。そこで何かを私を待っているような気がしたし、また私は若い書店員補佐としてバーゼルで職場を見付けるために、あらゆる努力をした。それは成功し、1899年の秋に私は、ニーチェの全集（当時、出版されていた限りの）とベックリンが描いた額縁入りの『死者の島』を、全財産をつめた箱におさめて、またバーゼルに着いた。私はもう子供ではないし、幼年時代のバーゼルや伝道館とその付近の様子などは、もはや無関係だと思った。私はすでに小冊子ながら詩集を出版していたし、シヨールペンハウアーを読み、ニーチェに夢中になっていた。バーゼルは私にとって、いまや特にニーチェ、ヤコブ・ブルックハルトまたベックリンの町であった。」（井原恵治訳）

ヘッセのバーゼル時代は1899年秋から、1904年の9月、ボーデン湖とライン河との境にある、ガイエンホーフエンという小さな村に移るまでの4年間ということが出来るであろう。世紀末から20世紀初頭という時代背景と、ヘッセの青春時代から青年期に移ろうとする時期であり、彼の作家としての出発点となったという時期として、彼自身にとっても思い出深い町ではないだろうか。彼が、バーゼルと結びつけて名をあげた、ヤコブ・ブルックハルトとニーチェのかかわりについてのエピソードを簡単にふれておこう。

1899年1月6日。バーゼル大学の美術史家ヤコブ・ブルックハルトは、北イタリアのトリノにいる友人ニーチェから届いた手紙を、同僚のオーヴァーベックに見せた。支離滅裂な内容だった。「私は神であるよりもむしろバーゼル大学の教授でありたい…」と始まっている。ニーチェの親友オーヴァーベックは神経科の主任教授と相談のうえ、トリノに直行した。ニーチェはすでに精神の昏迷のうちにあったが、自室のソファーにすわって最後の著作『ニーチェ・コントラ・ワーグナー』の校正刷りの上におおいかぶるようにかがみこんでいた。そうしなければ校正刷りが見えなかったのだ。…室内には紙切れや電報の頼信紙が散らばっている。それらには「十字架につけられし者」とか「ディオニソス」と発信者のサインがしてある。ニーチェの晩年は激越な反キリスト教の闘いだった。しかしこの対照的なふたつのサインは、彼の闘いが、外的なキリスト教に向けられたものというより、むしろ彼自身の内面での闘いだったことを示している。

オーヴァーベックは、…病むニーチェをバーゼル経由でドイツに連れ帰った。…国際列車がスイスに入り、ザンクト・ゴットハルトのトンネルを抜けていくとき、病むニーチェは声低く歌っていた。…作曲をよくしたニーチェが、自身の詩に曲をつけたものだ。…

橋のたもとに、つい先ごろ私は立った。
とび色の夜だった。
遠くから歌が聞こえた。
黄金色の滴くが盛り上がり
さざ波の面てを遠く走った。
ゴンドラと、ともしびと、音楽と——
酔い痴れて遠く暗闇に流れていった…
わが魂の絃のしらべはそれに合わせ
目に見えぬ手にかき鳴らされて
そっとゴンドラのうたを歌った、
華麗なる至福に震えつつ。
——誰かがそれに耳を傾けたらろうか。

……彼の心を満たし震わせた至福の思い、浄福感に「誰かが耳を傾けたらろうか」と問うているときの「誰か」はどこにもいないのだ。…彼のこのつぶやきは、ヴェニスへの、愛するイタリアへの、ひいて彼自身の生涯への別れのしらべであった。(7)

ヘッセは少年時代の混乱から抜け出して、チュービンゲ時代を経て、バーゼルで、ヴァッカーナゲル家へ、ラ・ロシュ家の音楽の夕べというような、古い文化の活発な精神と高度に洗練された社交にも近付きになる。又同時にバーゼルは彼に、造形美術の世界の新しい目をひらかせ、感覚的に美しいものへの目を開いてくれた。毎日のように彼は大寺院へ通い、又何時間も美術館ですごした。

Schön, überaus schön war sie damals in der Kunsthalle, Sie sah mich nicht. Ich saß ausruhend beiseite und blätterte im Katalog. Sie stand in seiner Nähe vor einem großen Segantini und war ganz das Bild versunken. (8)

その時、美術館では、彼女は美しかった。非常に美しかった。彼女は私に気づかなかった。私はわきのほうにこしかけて休息し、目録を繰っていた。彼女は私のそばでセガンティニの大きな絵の前に立ち、まったく絵に吸いこまれていた。

Unzählige Künstler haben so versucht, ihr Heimweh in seligen Bildern auszusagen, und irgendein kleines liebes Kinderbildchen von Ludwig Richter singt dir dasselbe Lied wie die

Fresken von Pisa. Warum hat Tizian, der Freund des Gegenwärtigen und Körperlichen, seinen klaren und gegenständlichen Bildern manchmal jenen Hintergrund vom süßesten Ferneblau gegeben?

Es ist nur ein Strich tiefblauer, warmer Farbe, man sieht nicht, ob er ferne Gebirge oder nur den unbegrenzten Raum bedeuten will. Tizian, der Realist, wußte es selbst nicht. (9)

無数の芸術家が、こうして郷愁を聖なる絵で表現しようと試みた。ルードヴィヒ・リヒターの小さい愛らしい子どもの絵の一枚一枚が、ピサの壁画と同じ歌を歌っている。なぜティチアンは現実的なものや肉体的なものを好んで描いたのに、その明快な具体的な絵に、甘美きわまるはらかな空色を、しばしば背景に添えたのだろうか。それは紺青のあたたかい色の一はけにすぎない。ティチアンが現わそうとしたのが、遠い山々であるのか、それとも無限な空間にすぎないのかは、わからない。写実家のティチアン、自分でもそれがわからなかったのだ。

「カーメンチント」の中から二ヶ所の描写を引用したが、ヘッセが、バーゼル時代に、ブルックハルトを通して、又、バーゼルの美術館や、イタリア旅行を通じて、美術に、芸術全般に目をひらかれ、影響を受けていったかを示している箇所だと思う。

私のヘッセとマンのかかわりのあった土地への旅も今回で三度目で、1977年の夏はマンの墓地のあるキルヒベルク、トーマス・マン文庫のあるチューリッヒ、彼の生まれたリューベック、長く住んだミュンヘンそしてヘッセの生地カルブと「車輪の下」「知と愛」等の舞台となった、マウルブロン修道院のあるマウルブロンを訪ねた。1982年の夏は、ヘッセが書店員として住んだチュービンゲンとマンの最後のドイツの住居や若い時代の住居跡をミュンヘンに再び訪ねた。1983年の夏は、一人旅で、ヘッセとマンの、ささやかな私の文をまとめる為に集中的に幾つかの地を訪ねた。マールバッハのシラー博物館、シュトットガルト郊外のエスリンゲンそしてスイスのバーゼル、ベルン、ルツェルン、チューリッヒ、ルガーノ、モンタニョーラの各地を訪ね歩いてみた。前回報告したのはヘルマン・ヘッセのチュービンゲン時代までであったので、ヘッセが一躍作家として名をなした作品「ペーター・カーメンチント」〈Peter Camenzind〉を書いたバーゼル時代をまとめておこうと思う。

バーゼルはヘッセが幼年期を父の伝道館ですごした地であり、作家としての道を歩み出す重要な4年間をすごした地であって、訪ねてみたいと思っただけではなかったが、旅行をする仲間や日程の関係でどうしても立ち寄ることが出来なかった。1977年の夏の旅は、ルツェルンから、ヘッセの生地カルブを訪ねる途中、バーゼルのシュバルツバルト橋〈黒い森橋〉を渡ってドイツ入りをしたけれど、自動車の旅は、あっという間にバーゼルを通りすぎてしまった。後で調べて見るとこの日は1977年の8月7日(日)で、今度バーゼルを訪ねた6年目の1983年8月7日(日)と偶然にも同日で



バーゼル美術館 (St. Albano-Graeben 16) 中央はロダンのカレールの市民像

あった。1983年の夏のヨーロッパの旅は、雨に降られて、この日は久しぶりに晴れあがった日であった。雨が降って全く晴れなかつたザルツブルク（オーストリアの街で、モーツアルトの生地として有名、毎年ザルツブルク音楽祭は、夏の有名な行事である。）からチロルの谷間をぬって、リヒテンシュタイン公国を通りスイスのチューリッヒで列車を乗りかえて、首府のベルン市の宿、Nationalに入ったのが昨夜。屋根裏部屋の朝は、あちこちの教会からの鐘の音で目をさまされて、明るい朝のベルンのスカイラインが古い街のヨーロッパらしさを持っている。その日は予定していたのはベルン市内を見物することであったが、ベルン美術館が改装中であることが行ってみてわかつた。10月まで閉館されないとのことである。パリのオランジュリ美術館の改装はもう何年も続いている、結局今までに（1983年はまだ閉館されたままであった。）見る事が出来ない。それで、久しぶりの晴天に、ベルンの旧市街を散歩して見て歩いた後、（ベルンの旧市内は、思いもしない程、狭い区域である。）ベルン中央駅（プラットフォームは街の景観を守るために地下になっている。）の地下のプラットフォームから汽車に乗って、アーレ川の鉄橋を渡って、バーゼルへ向つた。ベルンとバーゼルの間は、平凡だけれど、豊かな牧草地と小さな山地が続く。急行で1時間の道のりでバーゼルの中央駅に着いた。列車はゆっくりとカーブを曲りながら中央駅につく。正式名は Hauptbahnhof S. B. B. である。S. B. B. はスイス国鉄の略字である。その中央駅の先半分は S. N. C. F. フランス国鉄駅であつて同じ駅の中に国境がある。又、ライン河をはさんで Badischer Bahnhof (D. B.) ドイツ駅もある。ベルン市の駅は直接旧市街につながっているのに対し、バーゼル駅の駅前には殺風景で、近代的な自動車道路が走っている。バーゼル市は豊かな近代都市である。バーゼルでは、主として三つの場所、バーゼル市立美術館 <Kunstmuseum>、大寺院 <Münster> 市庁舎 <Rathaus>、を見る予定にしてきた。それらはいずれも旧市街にあるはずだ。少し熱くなりはじめた昼下がりの人通りの少ない道を歩いて、ようよう美術館の横に出た。正面に廻って回廊様式の建物に入ろうとすると、ロダンのカレールの市民像が置かれている。クロー

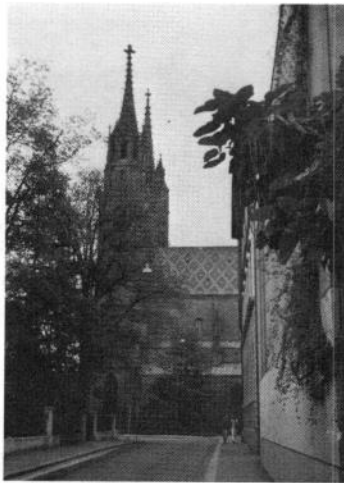
クに荷物をあづけて、一階、二階、三階のギャラリーを見て歩く、15世紀のホルバインから、私の好きな印象派等の画家達の絵や現代の描象画、モダンアートモザイクに至るまでの展示作品は、思いの外、すばらしい。是非もう一度ゆっくり見てみたいと思わせる美術館である。ヘッセが、ニーチェ、ブルックハルト、ベックリンの街だといった、ベックリンの絵も（1827年～1901年、バーゼル生れ）多数残されているが、私には残念ながらそれほど感動をおぼえなかった。ルソー、ゴーギャン、モネー、シャガールの方に心引かれた。Kunstmuseum を出て St. Albau-Graben 通りを横切って Rittergasse 〈騎士横丁〉へ左折すると Münster の二つの尖頭が見える。外観からは、屋根の模様で特色が見られる。内部は、もうたくさんの教会を見つづけてきたので、さほどめずらしさはなかった。裏庭のテラスは高台にあって、真下に、とうとうとライン河が流れている。眼下のライン河は全く川幅も広く、水も深く、流れも早そうに見える。対岸のライン散歩道〈Oberer Rheinweg〉までは、観光用のフェリー（渡し舟）が出ている。兩岸にロープが張られ、それを伝って、渡っているようである。正式名は Münsterfähre（大寺院の渡し船）と云われ、この眺めからヘッセはジッターダの渡し船の話のヒントを得たのではないかといわれている。又、1901年9月からはライヒ書店から移ってヴフッテンヴィール氏の古書店に勤めた際の上司、ユーリウス・パウエル氏は、ジッダールタの渡し守ヴァズデーヴァのモデルといわれている人と出会っている。〈Peter Camenzind〉の中に、ライン河とバーゼルの名をひろいあげることが出来る。

In meiner kleinen, hoch und frei gelegenen Stube über dem Rhein studierte und grübelte ich viel. (10)

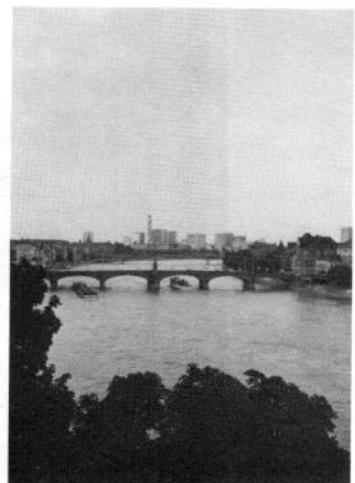
ライン河をのぞむ私の高い見晴らしのよい小さなへやで、私はしきりに勉強し、物思いにふけた。

テラスからは、はるか向うに南西ドイツの低い山地の森も見える。ライン河を少し下って古いミッテレ・ライン橋に出て、振りかえった大寺院の塔の見える風景は美しい古い街の風景

だった。ライン河を渡る夏の風に涼を得て、再びとって返して、市役所〈Rathaus〉へ電車通りを、登っていった。左折をすると、赤い砂岩のめずらしい市役所の建物が見えた。Marktplatz 広場には観光客が行きかっている。赤い砂岩造りの建物の壁には、聖人(?)のフラスコ画が描かれている。豊かなバーゼル



Münster (Basel)

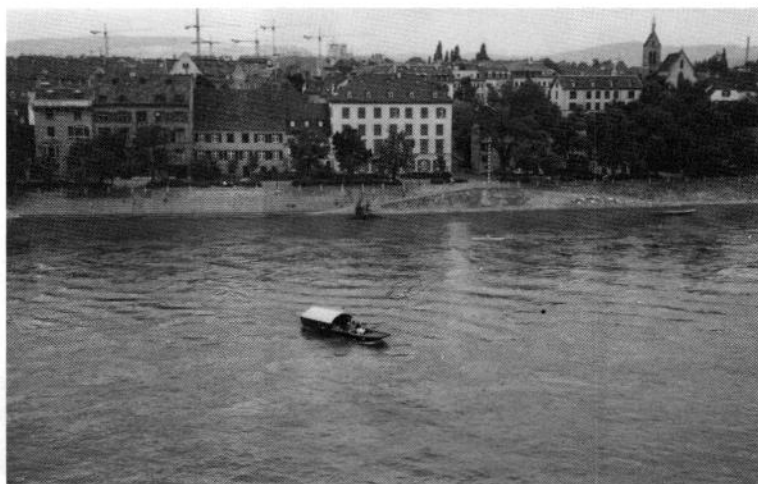


Rhein (Basel) と Mittlere Rhein Brücke

の象徴のように、夏の陽光に輝いている。日曜日なので、お店は閉じているが、観光用のテラスカフェには、楽しげな客が集まっている。駅にもどる途中、Kunsthalleにも立ち寄った。現代アートの展示をおこなっていた。〈Peter Camenzind〉の作品にあるBaselの美術館はKunsthalleであって、Kunstmuseumではないからだ。しかしこの短い滞在では、セガンティーニの絵をながめるエリザベートをうっとりとして眺めている Camenzind、ベックリーンの展示室を見る Camenzind も Kunsthalle とあるが、それと思われる絵は、Kunstmuseum に今はある。ヘッセがモデルにしたのはどちらであるかは明らかではない。余談ではあるが、私自身にとってのセガンティーニ（1858—1899・南チロルのアルコ生れ）は、倉敷の大原美術館にあるアルプスの山々を背景にした、少女の絵「アルプスの真昼」と、フランクフルト市（西ドイツ）市立美術館へ有名なヴァイルヘルム・ティシュバインの「カムパニアのゲート」の絵を見に行った時にみた一枚の彼の作品が、とても印象に残っている。ただ、黒い森〈Schwarzwald〉の中にある大学都市チュービンゲンから来て、青年としてささやかな社交の場へ、造形美術へ、イタリア旅行、スイスの各地への旅行と、少しづつ外に向けて心を開かれていったヘッセのきわめて大切な出発点となった、バーゼルを、今実感しないわけにはいかない。Bernの宿にもどって、シャワーをあびると、すっかりつかれがした。Hotel・Nationalの屋根裏部屋の窓には、スイスのおそい夕ぐれの濃い青の空がまだ残っている。

バーゼル時代の終りは、〈ペーター・カーメンチント〉の出版とすばやい反響、1904年8月、バーゼルの写真館の娘、マリア・ベルヌイとの結婚によってもたらされた。その出世作となった〈ペーター・カーメンチント〉の前にバーゼル時代に知っておくべきことは〈ヘルマン・ラウシャー〉（Hermann Lauscher）と1901年3月25日～5月19日までの最初のイタリア旅行と、1903年4月フィレンツェへの招待に応じて行った第2回目のイタリア旅行のことではないかと思う。

ヘルマン・ラウシャーの中に1900年の日記（Tagebuch 1900）バーゼルとフィッナウ（Vitznau）



Münster Fähre (Basel)

の二ヶ所における日記がつづられている。

Vitznau, 5. September 1900

Von der Höhe der Hammetschwand ist das Wasser für mein Auge eben noch zu genießen, darüber hinaus schwindet Glanz und Farbe von Meter zu Meter, und von Rigikulm aus ist der See stumpf und beinahe grau anzusehen. ...

Statt dessen Kreuze ich den ganzen Tag im Boot auf der Fläche und in den Buchten umher, Ein leichtes Kielboot, für die Ruhepausen eine Zigarre und ein Band Plato, sowie Rute und Angelzeug, das ist meine Ausrüstung. (II)

「ハーメッチュバンド壁の高さからは水は私にも十分楽しめ、それをこえていくと、だんだん輝きと色を失って行き、リギ山からは湖はほとんど灰色のようにみえる。...

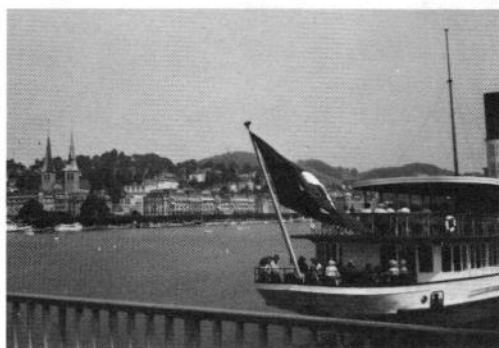
私は一日中ボートに乗って湖上や入江を縦横に漕ぎまわる。軽快なキールヨット、休み時間の葉巻一本、プラトンの著作一冊、それに竿と釣道、というのが私の装備だ。」

ここに出ているフィッナウ (Vitznau) はルッエルン (Luzern) から現在の観光汽船で、一時間のところにあるフィアバルトシュテッテ湖 (Vierwaldstätter See) 畔にある小さな村の名前であり、Rigikulm (リギ山) 1798m は湖にそそり立つ山である。バーゼルでの仕事の合い間に遊び歩いた場所の中でも一番好んで遊んだのが、この湖のようであり、ボート遊びや、雲やちょうの観察は〈カーメチント〉の中に取り入れられている。別名ルッエルン湖ともいわれるこの湖畔へ私をはじめて来たのは1971年の夏。イタリア旅行から自動車で峠を越えてこの近くに宿をとったのだけれど、今はどのあたりに泊ったのか記憶にない。ただ湖畔で女子大生達と写真をとっているが、その場所もわからないほどずいぶん前になってしまった。おまけに〈ペーター・カーメチント〉に出てくるチュリッヒ湖にまどわされて、彼の最も愛し、したしんだ湖は、このフィアバルトシュテッテ湖の方であることを不明にも、〈ヘルマン・ラウシャー〉を手に入れるまで、十分納得しかねていた。1983年8月14日、昨夜のジュネーブの宿を出て、午後1時すぎに Luzern 駅に着き、駅の近くの Hotel Alpina に荷物を置くと、とって返して、駅前の Laundungsbrücken ラウンドングス棧橋から定期観光汽船に乗った。アルプスの水をたたえた湖は、陽光に濃い青の波をゆっくりとたたえている。駅前棧橋のにぎわいはたちまち遠ざかって、船べりにもたれて湖の変化、変り



赤い砂岩の市役所 (Basel)

ゆく周辺の山々をながめた。舟遊びを楽しむ人々が湖の中央にまで進みでている。リギ山へ、ロープウェイで登る入口としてのヴェギス (Weggis) に立ち寄って、かなりの乗客が下船した。めずらしく、船員だったという老夫妻に話しかけられて、ずい分昔に神戸、横浜、東京に行ったことがあるという話を聞いたりしているうちに、この船の終着点、フィッナウに着いた。全く小さな村だが、リギ山登山口ということで、観光客がにぎわっていた。夏の観光シーズンがすめば、ヘッセがのんびりと湖水を楽しんだ雰囲気になって、静かな山村にもどるだろう。ここからはヨーロッパ最初の登山電車 (フィッナウ・リギ山間の開通は1871年、リギ山・アルトールナウ間は1875年に開通) でリギ山に登ることにした。ヘッセ研究者の高橋健二教授によるとフィッナウの近辺には Camenzind という姓の人達が多いので、ヘッセは、そこから Peter Camenzind の名をとったのだろうといわれている。



Luauungsbrücken 栈橋に泊る定期船



リギ山頂から見た湖面

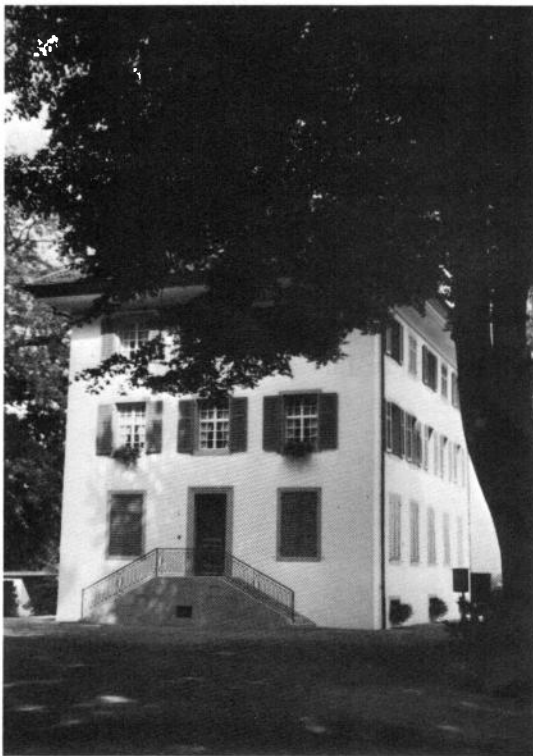
夏山の午後の天候はくずれやすいといわれるように、リギ山頂は涼しいが、少しガスが出て、真下に見えるルツェルン湖も、ぼんやりしてしまっていて残念であった。翌日はルツェルン市内の散歩とルツェルン郊外のトリプシェン (Tribtschen) のR. ワグナー博物館を予定した。バーゼル大学のブルクハルト教授とニーチェは同じく教授をしていたときに、R. ワグナーを、このトリプシェンの地に訪ねて、ワグナーの知己を得た。その時の様子を、ニーチェの姉である、エリーザベット、フェルスター＝ニーチェが「ニーチェの生涯」の中で次のようにしている。

「兄は、聖霊降臨節に入る前の土曜日に当る1869年5月15日に、初めてフィーアバルトシュテッター湖へ行った。ルツェルンに来て、兄は昨年秋のあの招きに応じて別荘 (トリプシェン) にリヒャルト・ヴァーグナーを思い切って訪ねてよいものかどうか思案した。」

この時は、たまたま出てきた使用人がとり次いでくれ、招かれたのだけれど予定があって、ニーチェは立ち去ったが…

「兄は聖霊降臨節の月曜日の早朝ルツェルンを通してトリプシェンに赴き、それから、後日兄の心の幸せとなり、孤独の慰めともなった、あの貴重な日々の第一日目を、リヒャルト・ヴァーグナー及び妻のコージマと共に過ごしたのである。」 (12)

チュービンゲン時代からニーチェを愛読していた若きヘッセは、このトリプシエンのワグナーの家を訪ねてみたりもしたようだ。現在もこのワグナーとコージマが住んでいた家（1866年—1872年）は、今、ワグナー博物館（Richard Wagner Museum）として残っている。ルツェルンは日本人観光客が、日帰りでユングフラウ・ヨッホ等へ行く途中のちょうどよいワンポイント観光地として適切らしい。Seenbrückeの橋のたもと、Schwarzenplatzは何台もの観光バスが停車して、どっと日本人観光客が短い観光を楽しんでいる。最近では、チューリッヒ市内を歩いていた時にも、日本の制服を着た女子高校生にも出会ったし、その朝も、小中学校生達が、先生らしい人に引率されて湖畔にたむろしている。そのあたりには、有名な Kapell brücke（カペル橋）があり、それはロイス川が湖から流れる場所にななめに横切っている屋根つきの木橋である。少し川下にある Sprenerbrücke 別名「粉ひき橋」があり、ロイス川の右岸が旧市街である。ゆっくり散策しても半日もあれば、ルツェルンの街の名所を見ることが出来る。午後少し涼しくなる時間に、ホテルからトリプシエンへ歩いてみた。途中には、湖畔の遊泳場があり、多数の親子づれが楽しんでいる。夏の暑い日中30分も歩いてずい分疲れたところに、ヨットハーバーに出た。その先が、少し森になって湖面につき出ている。地図をたよりにすれば、この辺りがトリプシエンだと思うが、それらしい建物も見えない。犬をつれた婦人にたずねたら、林の奥に Museum はあるとのことで、森の小道へ入っていった。しばらく林の小道を登りつめて行くと、明るい陽



ワグナー館（Triebshen）

光に白い建物、窓は緑にぬられたしゃれた建物が見えた。これが、ワグナーとコージマが、およそ6年住んだ、別荘であった。ところが、案内書には、毎日開館と書かれていたが、今日は月曜日、月曜日は定休日と記されていた。前面の庭には、有名な指揮者、トスカニーニの記念碑があったが、博物館の中は入ることが出来ない。しかし、はなやかな景勝地に建物があって、ワグナーにふさわしいと思われた。その明るく湖面に開けた芝生の上で、夏の Urlaub を楽しむ若い人々の裸身が一層はなやいでいる。

ルツェルン（Luzern）のことを取りあげた最後のエピソードとして、1947年7月23日に、亡命先のアメリカから、ヨーロッパ旅行中のトーマス・マンとヘルマン・ヘッセ夫妻が、Hotel National（中央駅前の観光船の棧橋から大寺院 Hofkirche の二つの塔の前に

見える三つの有名なホテルの一番手前にある古いホテル)で出会った。当時、ドイツ人達は亡命したトーマス・マンをドイツへむかえる状況になかった。トーマス・マン夫妻が、ヨーロッパへ帰ってくる事が出来たのは、1952年6月30日、チューリッヒ近郊クローテン空港へニューヨークからアムステルダム経由で着いたその日まで、ずいぶん長い戦後であった。ウエンゲンから1947年8月にヘッセからマンにあてた手紙の注に。

H. H. und T. M. hatten sich am 23. Juli im Hotel National, Luzern, getroffen. An Gunter Böhmer schrieb Hesse am 29. 7. 1947>In Luzern hatten Bekannte von uns im ersten Hotel Zimmer genommen, ...。Mit Thomas Mann war es recht schön, wir waren auch miteinander in Triebshen im Wagnermuseum, wo Sie eine Kleine Zusammenstellung des denkbar Grausigten an deutsch-romantischer Malerei vom Ende des 19. Jharhunderts hätten sehen können.<Und an Richard Benz :<...。Da war mit Ausnahme einiger Fotos und Briefen alles gesättigt mit einem hautgout von schlechtestem 19. Jharhundert, eine verschollene Theater-welt, aber daneben in einem Kabinett fand ich unter Glas ein mir vorher nicht bekanntes Jugendbild von Nietzsche, als Pforta-Schüler, das könnte ebenso gut den Jean Paul der Flegeljahre darstellen, es wog den ganzen übrigen Zauber und Plunder auf.< (13)

1947年7月23日、ルツェルンのホテル ナチオナルでマンとヘッセ夫妻が久しぶりに出会った様子が、書かれている。その時、ルツェルンの近くのトリプシェンにあるヴァグナー記念館(すでにこの文の中に記述しておいた。)にも出掛けていった様子が、ヘッセがグンター・ボーマー、リヒャルト・ベンツにあてた手紙に、かなり詳しく報告されていて、同時代に生き、同じドイツのナチズムに抵抗した同志としての再会の様子が感動を持って伝わってくる。マンはその再会の喜びを、1947年8月10日付、チューリッヒの「ボール・オ・ラック」ホテルから次のように返書を出している。

... Es war ein gutes Zusammensein, an das wir das ganze Jahr zurückdenken werden. ... (14)

「すばらしい再会でした。この年じゅうそのことを思い出すでしょう。…」

(3) イタリア旅行について

作品「ペーター・カーメンチント」はヘッセの詩と真実ではあるが、かなり自伝的要素の強い小説といえよう。又、ドイツ文学の伝統、ゲーテ以来とられた一形式の成長小説又は教養小説というジャンルに類するものと云えるであろう。この小説の主題である愛は、女性への愛、すわちエリザベートの、そして無所有の聖者、兄弟愛の聖者、アッジジの聖フランシスへの傾倒による不具者のポビーへの無私的愛である。アッジジを含む、イタリアへの旅行は、この作品に於ても重

要な赤い糸となっている。ゲーテや画家デュラーそしてモーツァルトもアルプスの北に住む人々の、南の国イタリアへのあこがれは、彼等の学問を、芸術を花ひらかせる母となっている。「ペーター・カーメンチント」のイタリアの旅は、事実ヘッセのイタリア旅行の体験がとり入れられている。

…ウルン湖とゴットハルト峠が来た。それから、テッシン地方の小さな山村、谷川、石のごろごろした山腹、雪の山頂などが来た。それから平らなブドウ畑の中に最初の黒ぼい石の家が見えた。そして、湖に沿い、肥沃なロンバルディアの平野を縫って、そうぞうしく活気のある、不思議に魅惑的であると同時に親しみがたいミラノに向って、期待に胸のふくらむ旅を続けた。

…ジェノヴァで私はもうひとつ大きな愛に恵まれた。

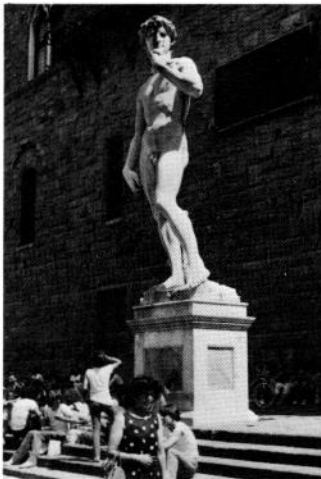
…ラッパロで泳いで、私ははじめて海と取り組み、からい塩水を味わい。大波の力を感じた。

・・・私たちはフロレンスに着いた。この町は、たくさんの絵や、それに十倍する夢の中で見知っているとおりの姿をしていた。——ヴェッキオ宮の大胆な塔が輝く空に奔放にそそり立っていた。

…私は、聖フランシスの歩いた道をたどり、彼が自分と並んで歩いているように感じたことも少なくなかった。——日をうけて輝く斜面でレモンを摘んで食べ、小さい村に泊まり、ひとり心の中に歌い、詩をつくり、アンジの聖者の寺で復活祭を祝った。… (15)

伝記データによると：

1901 25. März—19. Mai : Erste>Italienische Reise <mit dem> Cicerone <von Jacob Burckhardt im Gepäck : Mailand-Genua-Florenz-Bologna-Ravenna-Padua-Venedig. 1903 1.-24. April : Zweite>Italienische Reise<mit Maria Bernouli : Mailand-Florenz-Pisa-Genua. Sie kehrt am 14. April nach Basel zurück ; Hesse fährt nach Venedig. (16)



ヴェッキオ宮の前のダビデ像



ドームの天井から見たフローレンス
(フィレンツェ)

短い資料に見られる) Cicerone (くは正式には) Der Cicerone (「チチェローネ」の書名で、バーゼルに於て、1855年、ブルックハルト、37才の時の著書である。彼の一年余りのイタリア旅行で書き記されたもの。イタリアに現存する古代にいたるまでの個々の美術品とその作者について詳細に書かれた、すぐれた美術史であると同時に鑑賞の手引である。ブルックハルトは、この著作によって、同年の秋、スイス連邦工業大学芸術史教授として招聘された。又、ヘッセ自身は、ブルックハルトの主著である) Die Zeit Koustautin des Grossen (「コンスタンティヌス大帝時代」1853年刊、) Die Kultur der Renaissance in Italien (「イタリア・ルネサンスの文化」1860年刊をチェビゲン時代に読んでいたらしい。

北国で (Im Norden)

わたしの夢みていることを言えというのか。

静かに太陽の照りつける丘に、

黒い木立ちの森と、

黄色い岩と、白い別荘がある。

谷間に横たわる一つの町、

白い大理石の教会のある町が、

わたしに向ってかがやく。

町の名はフィレンツェと呼ばれている。

狭い小路にかこまれた

古い庭の中で、

わたしがそこに残して来た幸福が

わたしをまだ待っているにちがいない。 (17)

このヘッセの第一回イタリア旅行のフィレンツェ滞在の時と同じくして、トーマス・マンはルネッサンス劇「フィオレッツァ」のためのフィレンツェ旅行をしている。その資料として、マンは、パスクアーレ・ヴィラーリの「サヴォナローラとその時代」、ヤーコブ・ブルックハルト「イタリア・ルネッサンスの文化」ジョルジョ・ヴァザーリ「芸術家列伝」を1901年2月頃から、読みあさっていた。1901年4月20日頃から5月20日まで、兄のハインリッヒ・マンが、フィレンツェのヴィオ・カヴール11番地3階のフォンディーニ夫人の経営する「五リラパンション」を弟のため用意して置き、しばらく兄弟はそこに住んで、兄はまもなく取材のためナポリに立った。ちょうどこの同じ時期に、ヘルマン・ヘッセもフィレンツェに来ていて、シニョリア広場の上の四階の部屋から、サヴォナローラが処刑された広場を見おろしていた。こんなに同じ時期に、同じフィ

レンツェに滞在していても、二人は未知の人であった。彼等が、面識を得るのは、この文の最初に記述したように、S. フイッシャーの紹介で、ミュンヘンのあるホテルで引きあわされた1904年まで、まだしばらく時間が必要だった。

注

- (1) ヘッセ=マン往復書簡集 井手貫夫・青柳謙二訳 筑摩書房 S. 146
- (2) HERMANN HESSE 1877・1977 Stationen seines Lebens, des Werkes und seiner Wirkung Deutsche Schillergesellschaft Marbach S. 165
- (3) ヘッセ=マン往復書簡集 S. 199
- (4) HERMANN HESSE 1877・1977 S. 207
- (5) Ibid. S. 116-7
- (6) HESSE Eine Chronik in Bildern Suhrkamp Verlag S. 34
- (7) ブレンナー峠を越えて 小塩節 音楽之友社 S. 140-142
- (8) Peter Camenzind Hermann Hesse Suhrkamp taschenbuch S. 89
- (9) Ibid. S. 90-91
- (10) Ibid. S. 80
- (11) Hermann Lauscher Hesse Insel taschenbuch S. 131
- (12) ニーチェの生涯(上) 若きニーチェ エリザベト・ニーチェ著 浅井真男訳 河出書房新社 S. 201
- (13) Hermann Hesse Thomas Mann Briefwechsel Bibliothek Suhrkamp S. 189
- (14) THOMAS MANN BRIEFE 1937-1947 S. FISCHER VERLAG S. 546
- (15) 郷愁(ペーター・カーメント) ヘッセ著高橋健二訳 新潮文庫 S. 85-89
- (16) HERMANN HESSE 1877・1977 Deutsche Schillergesellschaft Marbach S. 81.
- (17) ヘッセ全集10 孤独者の音楽 詩集「階段」 高橋健二訳 新潮社 S. 127

参 考 文 献

- ・ヘッセ B. ツェラー 井原恵治訳 理想社
- ・ヘッセ全集別巻 改訂 ヘッセ研究 高橋健二著 新潮社
- ・ヘルマン・ヘッセ研究 井手貫夫著 三修社
- ・トーマス・マン K. シュレーター 山口知三訳 理想社
- ・評伝 トーマス・マン 菊盛英夫著 筑摩書房
- ・トーマス・マン全集 中矢一義他訳 新潮社
- ・ブルクハルト 世界名著56 柴田三郎 中央公論社
- ・ザ・ルネッサンス・ブック 中央公論社
- ・ニーチェ全集 理想社